2026 秋号
2026 年 4 号　No.27
ニッケ教育研究所　会報誌

未来Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー



誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために

ニッケ教育研究所

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

スマホで読める、感動のコラム！



ヤモリとセミ

真夏の陽射しが照りつけるなか、 セミの声があちらこちらで響いています。 子どもたち、 そして教職員の皆さまにとって、 …

続きはこちらから



決められた決勝点

一つの言葉が人生を左右するときがある。 一つの言葉から勇気が湧きあがり、 難局を乗り越えられるときがある。 …

続きはこちらから

ニッケ教育研究所のホームページを、是非ご覧ください！
https://nikke-edu.org/

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけませんか？ 子どもたちは“未来の宝”です。 私たちが発信する未来の宝を育む情報を、 学校・家庭・地域で是非ご活用ください。 入会のお申し込みは、 ホームページでご案内しています。

編集後記

行動や思考のお手本となる人のことを「ロールモデル」と言います。そして、 子どもたちの一番身近な「ロールモデル」は、 保護者・教職員・地域の方々といった私たち「大人」です。生成 AI の進化など変化のスピードが速い世の中で、 子どもたちが将来において豊かに過ごしていくために必要な力はこれまでとは大きく変わっていきます。変化が激しく正解のない社会において、私たちが子どもたちの「ロールモデル」になるためには、日常生活では「当り前のことが当り前になる」まで実行することに加えて、変化する環境に合わせて仲間と協力し「仮説➡検証➡修正」のチャレンジのサイクルを粘り強く回し続けることが必要と考えます。このような行動が義務となってしまうと何か息苦しさを感じてしまいますが、子どもたちに一番に伝えたいのは「大人になるのは楽しい」ということだと思います。子どもたちには、「ロールモデル」として、学び続け、チャレンジを楽しんでいる私たちの姿を見せたいものです。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長　楠本　景央

FOLLOW US!

未来Watch
2026 秋号（年 4 回発行） No.27
2026 年 10 月 20 日 発行
本紙掲載の記事は、 複写・複製・転載を禁じます。

《発行》 一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町 3 丁目 3-10
TEL: 06-6205-6665　https://nikke-edu.org/

一般社団法人
ニッケ教育研究所
NIKKE Institute of Education

未来につなぐ学校づくり

子どもたちは、やがてより広い社会との関わりを持っていくことになります。その未来を輝かせるために、必要な力を身につけておくことが大切です。ここでは、中学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。

第12回は、大阪市立市岡東中学校の鍋谷賀都緒校長です。

第12回 「大人も失敗してえぇやないか」から始まる学校改革

～新たな取組で築く、挑戦と安心の学び舎～

《大阪市立市岡東中学校》 鍋谷（なべたに） 賀都緒（かつお） 校長



本校（大阪市港区）は、1973（昭和48）年に市岡中学校の分校として開校しました。翌年には市岡東中学校として独立開校し、今年で53年目を迎えています。校内は比較的落ち着いていますが、近年、看過できない教育課題に直面しています。それは、2024（令和6）年度における不登校率の高まりです。現在も不登校の状況は深刻で、教職員一同、いかにして子どもたちに寄り添い、再び学びへとつなげていくか、そのための方策を模索し続けています。

学校理念〈使命〉 安心・安全な学校　学力・体力の向上　人間尊重の精神

めざす生徒像

- ○ よく聴き、よく見つめ、よく考えて、正しく判断できる生徒になろう。
- ○ 協力し、自主的にものごとにとりくみ、やりぬく生徒になろう。
- ○ 心身ともに健康な、たくましい生徒になろう。

見えてきた、 課題の本質

なぜ、これほどまでに教室での学びを継続することが困難な子どもたちが増えたのか。私はその背景を改めて見つめ直しました。そこで浮かび上がってきたのは、学校の中に少なからず存在していた「生徒を型にはめる指導」でした。社会や生徒を取り巻く環境が急速に変化する中で、かつての指導法が、知らず知らずのうちに子どもたちを息苦しくさせ、一人ひとりの多様な心に寄り添う妨げになっていたのではないかと感じています。

とりわけ、「教師が整える秩序」は、一見すると統制の取れた美しい教室をつくりますが、子どもたちから「自らの意思で選択し、失敗し、そこから学ぶ」という機会を奪ってしまう側面があります。自立した人間を育むためにも、学校は失敗に対して寛容な場所でありたいと考えています。テストの結果一つをとっても、ただ点数や合否に一喜一憂するのではなく、安心して失敗し、実力以上の「背伸び」や「挑戦」ができる環境をつくりたいと考えています。そのような安心感に満ちた**セーフティネットとしての土台を築く必要性**を強く感じています。

一方で、保護者からの苦情も増加する傾向にありました。私はこれを単なる「クレーム」ではなく、時代の変化に伴い、学校に寄せられる期待や求められる役割が変わりつつあることの表れだと受け止めています。そして今こそ私たちが変わり、学校という**組織を柔軟にアップデート**していかなければならない「変革の過渡期」にあるのだと感じています。

自立と安心を支える仕組みづくり

こうした課題意識から、子どもたちの**「主体的な挑戦」**を引き出す学びと、個々を温かく包み込む**「安心の居場所」**という二つの視点を軸に、新たな仕組みづくりに乗り出しました。

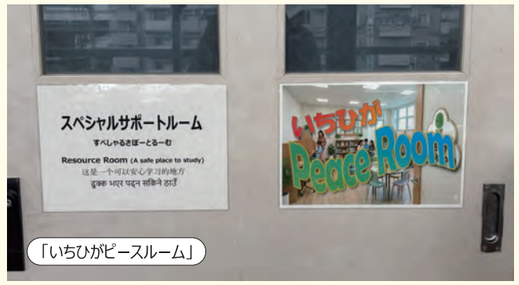
「主体的な挑戦」として取り組んでいるのが、昨年度に一年生で始めた探究学習**「みおつくし探究チャレンジ」**です。企業や大学などと連携し、実社会のリアルな課題に主体的・協働的に挑戦しました。また、経済産業省の補助金を活用し、他学年でも多様な探究学習を実践しました。加えて、外部の先進的な知見やテクノロジーを取り入れ、教科書での学びにとどまらない魅力ある学習活動の充実を図るとともに、昨年12月にはオンライン学習サービスを全校に導入し、子どもたちが自らの進度に応じて主体的に学べる環境を整えました。そして今年度からは、失敗を互いに受け容れ合いながら協働し、数値では測ることのできないレジリエンスや主体的な人間関係形成力を育む**「非認知能力向上の取組」**も本格始動させています。



探究学習の様子

一方で、「安心の居場所」として取り組んでいるのが、今年度、校内に開設したスペシャルサポートルーム**「いちひがピースルーム」**です。教室で過ごすことが困難な生徒たちにとって安心できる居場所となり、一人ひとりの繊細な心に寄り添いながら、それぞれの歩調に合わせた自立への支援を行う温かい空間として機能しています。

さらに、外出や人と対面することへの不安から登校することが困難な生徒のため、今年9月から、教育支援センターの**「メタバース」**を活用しています。これは、自宅からインターネットを通じ、アバターで参加できる仮想空間の居場所です。プレッシャーを感じず、他者とのつながりや学びを再開できる新たな支援モデルになることを期待しています。



「いちひがピースルーム」

「大人も失敗してえぇやないか」の精神

これらの改革を進めるにあたり、今年度の学校運営目標として次の二点を掲げ、教職員と共有しました。

- ☑ 飽くなき自己研鑽に努め、失敗を恐れず挑戦し生徒と共に高め合う。
- ☑ 一人ひとりの心に深く寄り添い、自立に向けた厳しくも温かい指導で確かな成長を支える。

しかし、教職員の意識改革は一朝一夕にはいきません。それでも学校改革を進めていく上で最も重要なのは、制度を変えること以上に、日々子どもたちと向き合う大人の**「マインドセット改革」**でした。なぜなら、「教師は失敗してはならない」という考えが新たな挑戦をためらわせ、画一的な指導につながっていた側面があったからです。そこで私は、教職員に対して次のような言葉をかけ続けました。

――大人は子どもたちの手本であるべきだが、**大人も失敗してえぇやないか。大人が新しいことに挑戦し、学び続ける姿を見せることが、子どもの成長につながるはず！**

この「大人も失敗してえぇやないか」という言葉が、失敗を許容し合える明るい職場風土をつくり、教職員が新たな一歩を踏み出す勇気となりました。そして、その教職員の熱量が、生徒たちの興味・関心を引き出し、挑戦を生きた実践に昇華させる原動力となっています。

素晴らしい未来を築く子どもたちと共に

私は、日頃から子どもたちに、「失敗を恐れない」「挑戦し続ける」「思いやりの心」を大切にしようと語りかけています。不確実性の高まる現代社会を生き抜いていく子どもたちには、本校を巣立った後も、困難に怯まないチャレンジ精神と社会への課題意識を持ち、ユーモアにあふれるアイデアを駆使して、自らの手で素晴らしい未来を築いていってほしいと心から願っています。

本校の学校改革は、まだ始まったばかりの「道半ば」です。多様なニーズへの対応や主体性を育む取組は、一人ひとりの変容を見守りながら、試行錯誤を重ねていかなければなりません。大人が「完成された存在」として振る舞うのではなく、学校そのものが生徒と共に未完成のまま、**失敗を重ねながらアップデートし続ける**――そのプロセスにこそ、教育の本質的な価値があると信じています。

おわりに

完璧な正解のない学校づくりの現場で、時に悩みながらも、日々子どもたちのために力を尽くしておられる全国の先生方に、私たちの試行錯誤の歩みが少しでもエールとなれば幸いです。まずは私たち大人が「失敗してえぇやないか」の気概で一歩を踏み出し、生徒と共に失敗を恐れず、互いに高め合う学校を一歩ずつ築いていきたいと思います。



私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざし、現場ではさまざまな創意工夫が活かされています。ここでは、小学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。
第23回は、大阪市立四貫島小学校の能勢由美校長です。

第23回 すべての子どもを多方面から見つめ 全教職員のチーム力で育てる

《大阪市立四貫島小学校》 能勢（のせ） 由美（ゆみ） 校長



本校（大阪市此花区）は、1919（大正８）年に創立し、100年を超える歴史と伝統に支えられた学校です。校訓である「明るく　仲よく　健やかに」に込められた保護者や地域の方々の強い願いと教育への熱い思いを礎として、先駆的な四貫島の教育が今も変わることなく受け継がれています。

創立以来、学校・保護者・地域が連携し、子どもを中心に据えた教育に取り組んできました。その伝統は、校章に描かれた４つの「わ」に象徴されています。一番上の「わ」は子どもたち、その下の２つの「わ」は、子どもたちを支える教職員と保護者です。そして、一番下の「わ」は、それらを支える地域の方々を表しています。

古き良きまちなみが残る四貫島地域の方々にあたたかく見守られ、支えていただくことで、子どもたちは「明るく　仲よく　健やかに」育っています。こうした伝統を受け継ぎながら、学校や地域を愛し、自分たちの学校や地域に誇りをもてる子どもを育てています。

校章



創立 100 周年キャラクター
『四貫島スターズ☆』

学校教育目標 人間性豊かな、たくましい子どもを育てる

校　訓
- ○ 明るく～自分のよさをのばそうとする。可能性を信じ、前向きに考える。
- ○ 仲良く～みんなと助け合って活動する。友だちのつらさやいたみを思いやる心をもつ。
- ○ 健やかに～自分の健康に気をつけ実践する。善悪を正しく判断し、行動する。

「めざす３つの力」の育成

学校は、「ある」ものではなく、「つくる」ものです。そして、「みんながつくる　みんなの学校　四貫島小」の合言葉のもと、「みんな＝自分」という当事者意識を育んでいます。また、**「めざす３つの力」**を掲げ、学校生活のあらゆる場面でその育成に努めています。

めざす３つの力
1. **「自分も人も大切にする力」** 自分が好き、やさしい心、自分らしく
2. **「自分で考えて行動する力」** どんな時も自分ならどうするかを考えることができる
3. **「自分からチャレンジする力」** 失敗をおそれない、あきらめない、チャレンジを楽しめる

全校朝会では学校生活について確認し、月１回の「朝会シート」で自分をふり返り、自分の言葉で考えをまとめる時間を設けています。子どもも大人も「めざす３つの力」を常に意識しながら、日々の生活と向き合っています。

子どもたちのふりかえり

わたしは、「自分で考えて行動する力」を1学期の目標にしたい。なぜこの目標を選んだかというと、高学年になったので低学年の子たちをどうやって楽しませるかを自分で考えて行動して学校生活を全力で楽しませてあげたいと思ったからこの力にしました。自分で考えて行動することで、考える力がつきます。考える力がつくことで、学校をよくすることができると思います。たとえば、ポイ捨てしている人がいたら自分でゴミ拾いをする。ごみを拾うことで、少しでも地域をよくすることができます。自分で考えて行動することで、自分も地域も、学校もよくすることができると、そう思ったのでこの力にしました。〈５年生〉

だれかがいやになったりしない学校。そのためには、人の失敗を笑わないようにする。なぜそう思ったのか、自分の意見を書きます。学校がいやなのはなぜ？→勉強がきらいだから→なぜ勉強がいやになる？勉強が好きな人はなぜ好きなのだろう→勉強が好きなのは得意だから、ほめられるからだと思う。ぼくも得意な分野だったりほめられたりすると少しだけ勉強が好きになる。反対にきらいになる理由は、失敗を笑われるから、怒られるからだと思う。なので、だれもがいやになったりしない学校にするには、人の失敗を笑わないようにするのが大切だと思います。〈６年生〉

安心・安全な学校づくり

すべての子どもが安心できる居場所をつくるため、子どもも大人も「めざす３つの力」を共有しています。教職員が「当たり前のことを当たり前にする姿勢」を示し、子どもたちの良き手本となるような教育活動を進めています。

そのために、年間を通して柔軟で弾力的なカリキュラム編成を行うことを大切にしています。さらに、教職員一人一人の個性や強みを生かし、良いと思うことは積極的に実践し、それぞれが存分に力を発揮するとともに、苦手なことは互いに補い合えるよう**チーム力の向上**に努めています。また、**子どもから学ぶ姿勢**を大切にしながら、教職員同士が互いに切磋琢磨できる組織づくりに取り組んでいます。サポーターや地域の方々と力を合わせて安心・安全な学校づくりを進めるとともに、自らを常に**アップデートし続ける**教職員集団をめざしています。


地域の方々から学ぶ様子



めざす３つの力



「わかる喜び・できる喜び」の環境づくり

授業においても、「めざす３つの力」を意識した学びを大切にしています。子どもの主体的な考えや活動を生かしながら、「子どもが学ぶ・子ども同士が学び合う」授業づくりを進めています。授業以外にも、様々な場面で自己肯定感が育まれるよう「大丈夫？」「どうしたいの？」「どうしたらいい？」と、子どもたちが自ら考えることを促す言葉かけを心がけています。また、子どもたちの興味・関心を高めるために、授業づくりや教室・校内掲示を工夫するなど、**「わかる喜び・できる喜び」**を実感できる学習環境づくりをめざしています。

大人も楽しむＰＴＡ活動

PTA活動は特別なものではありません。**「できる人が　できる時に　無理なく　楽しく」**を心がけながら、学校を**「自分たちがつくる」**という意識で参加する活動です。本校では、大人自身が楽しむ気持ちも大切にしています。地域の方々には四貫島小の卒業生も多く、母校を地域の誇りに思い、地域行事や世代間交流も盛んに行われています。春には花見を楽しむ「さくらまつり」、夏の終わりには地域・PTAのOB・OGや現役PTAが出店する「思いっきり四貫島」、冬には餅つきを中心に人の輪ができる「四貫島っ子フェスタ」が行われています。これらの行事には、子どもから大人まで多くの人が集い、世代をこえて交流しています。そこに集う大人たちの楽しそうな姿を見て、子どもたちは「自分が将来、地域のためにできること」を考えるようになっています。これからも、地域で育ち、地域とともに歩む四貫島小学校であり続けたいと願っています。


大人も楽しむ地域行事

「あこがれ」が育む学びと成長

これからの社会では、皆と同じことができる力だけでなく、一人一人の発想や視点にも価値が見出されるようになります。そのため学校教育においても、知識や技能の習得だけでなく、学びに向かう力や豊かな人間性を育むことが求められています。知識や情報をAIなどから容易に得られる時代だからこそ、自分で考え、粘り強く取り組み、人と協力する力といった**「見えない学力」**が、子どもたちの未来を支える大切な力になると考えています。

その取組の一つとして、「あこがれ」の存在である高学年、特に四貫島小のリーダーである６年生を中心に、**縦割り班活動**を大切にしています。６年生は下級生と関わる中で責任感や思いやりを育み、１年生から５年生は高学年の姿を手本にしながら、あいさつや学習、生活の仕方を学んでいます。こうした学年を越えた交流は、子どもたちの協調性や社会性を育むだけでなく、互いを認め合う温かな学校づくりにもつながっています。


縦割り班活動の様子

おわりに

今後も、こうした取組を基盤とし、全教職員のチーム力を発揮して教育活動のさらなる充実に努めてまいります。そして、子どもたち一人一人が自ら学び、互いを認め合いながら成長できるよう、保護者や地域の皆様と連携して、より良い学校づくりを進めてまいります。

子どもの可能性を拓くために㊤

～「長所と短所は表裏一体」という捉え方～



《ニック教育研究所顧問》 勝本（かつもと） 孝夫（たかお）
元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

はじめに

小学校の担任をしていたとき、「僕、これ得意やねん」「私、こんなことできるよ」という言葉を聞くたびに、嬉しくなりました。しかし、「僕なんかダメな子や」「私には良いところがないねん」という言葉には、胸が締めつけられる思いがしました。そのたびに、教師としての力不足を痛感しました。そうした子どもたちとの関わりを重ねる中で、子どもたち一人ひとりの「よさ」を見つけ、その「よさ」を自分自身で実感できるようにすることが、自尊感情を育み、可能性を拓くことにつながるのではないかと考えるようになりました。

ここでは私の教育実践をもとに、子どもたちの長所と短所をどう捉えるかという観点から、見つめ直してみたいと思います。まずは、私が小学校高学年の担任をしていたときに出会った、二人の子どもの姿を紹介します。

忘れられない二人の子

一つのことに集中して取り組む子

ある男子児童が給食当番で熱い汁物を配っていたときのことです。手際よく配膳することに集中していたせいか、周囲にまで気がまわっていませんでした。そのときです。近くにいた女の子が何かの拍子で動いたのです。４人分の熱い汁物がのったお盆が女の子に当たり、その子の頭上でひっくり返ってしまいました。幸い大やけどには至りませんでしたが、二人の心には大きなショックが残りました。

放課後、その男の子と今回の出来事について、なぜ起こったのかを落ち着いて話し合いました。

「どうしておかずをこぼしてしまったのか、その理由は分かる？」
「はい。僕は、冷めないうちにみんなにおかずを食べてほしくて、急いで配っていました。だから、近くの女の子に気がつきませんでした」

その言葉を聞きながら、私はこんなことを考えました。

――この子は、一つのことに集中すると、周りが見えなくなることがある。しかし、今回の失敗の背景には、“みんなのため”という思いから、一つのことに集中して取り組む姿があった。つまり、**周りが見えなくなるという短所の裏側には、一つのことに集中できるという長所がある。**長所と短所は、表裏一体なのではないか。



人の思いに誠実に応えようとする子

大阪城を描く写生会に出かけたときのことです。城の周辺には多くの外国人観光客がいました。城の近くで絵を描いていた女子児童に、ある外国人が「ハロー！」と声をかけてきました。女の子が嬉しそうに「ハロー！」と返すと、その方も喜び、今度はその子の写真を撮ろうとしたのです。女の子はそれに応じようとしていましたが、胸には名前と校名が記された名札が付いていました。この様子を見ていた私は、自身の英語力に不安を覚えつつも、「ノーフォト！ノーフォト！」と叫びながらすぐに駆け寄りました。幸い、写真を撮られることはありませんでした。

帰校後、その女の子と今回の出来事について、ゆっくりと話し合いました。

「今日の写生会で、どうして外国の方に写真を撮られてもいいと思ったの？」
「私は、外国の人が親切に挨拶をしてくれたので、嬉しくなりました。それで、写真を撮られることもいやではなかったんです。」

その言葉を聞きながら、私はこんなことを考えました。

――この子は、人の思いに誠実に応えようとする。しかし、その思いが強くなりすぎると、自分を後回しにしてしまうことがある。つまり、**自分を後回しにしてしまうという短所の裏側には、人の思いを大切にするという長所がある。**長所と短所は、表裏一体なのではないか。

二人の子どもから学んだこと

この二人の出来事を通して、私は三つのことに気づかされました。

1. 子どもの長所と短所は別々のものではなく、一つの特徴が場面や状況によって長所にも短所にも表れる。その特徴は、“その子らしさ”として捉えることができ、その中に子どものよさを見いだすことができる。
2. こうした“その子らしさ”は、普段の生活では気づきにくいことがある。しかし、失敗したときには、かえってはっきりと見えてくる。失敗は一見すると好ましくない出来事に思えるが、その背景には、その子の特徴やよさが隠れている。
3. 子どもの長所や短所を教師がどのように捉え、どのように働きかけるかは、子どもの自己理解を深めることにつながる。そして、自分のよさへの気づきが、自尊感情を育む土台になる。

脳科学者の茂木健一郎氏は、著書『生きがいの見つけ方』の中で、次のように述べています。

――長所と短所は常に表裏一体である。そして、長所と短所の「合わせ技」が顕著に表れるのが失敗の瞬間なのである。

もう少し詳しく説明しよう。実は多くの失敗は、長所がきっかけとなっている。

・チャレンジ精神が旺盛
・好奇心が強い
・集中力が高い

これらはすべて長所である。ところが、短所でもあって、

・チャレンジ精神が旺盛→ 無謀な挑戦をしてしまう
・好奇心が強い→ よく考えずに手を出す
・集中力が高い→ 他の重要なことを忘れる

という、長所ゆえの失敗も起こる。（注１）

私は、茂木氏の言う〝長所と短所の「合わせ技」〟とは、一つの特徴が長所にも短所にも表れることを指しているのではないかと受け止めました。一人目の子は、一つのことに集中して取り組む力がある一方で、周囲が見えなくなることがありました。二人目の子は、人の思いを大切にする一方で、自分を後回しにしてしまうことがありました。このように考えると、**短所として現れた姿の中にも、その子らしいよさが隠れている**ことが分かります。だからこそ教師は、短所を消そうとするのではなく、その背景にある**子どものよさを見いだし、それを伸ばしていく**ことが大切です。そして、そのような教師の見方が子ども自身の気づきにつながることを願っています。

（注1）『生きがいの見つけ方　生きる手ごたえをつかむ脳科学』茂木健一郎著、PHP新書、2025年7月、第1版第1刷、68～69頁から引用。

可能性が拓かれるまでのプロセス

二人の子どもの姿から学んだことを振り返ると、子どもの失敗から“その子らしさ”を捉え、そこにあるよさを子ども自身の気づきへとつなげていくことが、可能性を拓く第一歩になるのではないかと考えました。この一連の流れを、私は、子どもの可能性が拓かれるまでのプロセスとして、次のように整理しました。

私は、子どもの可能性は、**失敗の中に表れた“その子らしさ”を教師が見いだす**ことから拓かれるのではないかと考えています。失敗を単なる反省や指導の対象として終わらせるのではなく、その背景にある子どものよさに目を向けることが大切です。そして、その**よさを子ども自身が実感できるように支える**ことによって、自尊感情が育まれ、「やってみよう」という意欲や挑戦する力につながっていくのではないでしょうか。

失敗を、「その子らしさ」が見えるチャンスと捉える → 「その子らしさ」を教師が長所・短所の両面から捉え、その子の「よさ」を見いだす → 自分の特長に気づく → 「自分にもよさがある」「自分にもできる」という自尊感情が育つ → 自分を信じ、新しいことに挑戦する → 子どもの可能性が拓かれる

おわりに

下校時、子どもたちが、「今日は、この問題が解けた」「今日は、あの子と話ができてよかった」「今日は、みんなと力を合わせて楽しかった」と、にぎやかに言葉を交わしながら歩く姿を見ることがあります。私はそんな子どもたちの姿から、「自分にもできる」「自分にもよさがある」という小さな気づきが、一歩ずつ積み重なっていることを感じます。そして、その積み重ねが、やがて子どもの可能性を拓いていくのではないでしょうか。そのような子どもたちの成長に関わる中で、子どもの可能性を拓こうとする営みは、教師自身の可能性をも拓くことになるのだと、私は実感しています。教職を退いた今でも、その学びは私の中で生き続けています。

次号では、「長所と短所は表裏一体」という捉え方をもとに、子どものよさを子ども自身の気づきへとつなげる教師の働きかけについて、具体的な事例を通して考えていきます。